

話〇三—三二四六—五五五一、四六判、上巻二七三頁、下巻三一五頁、上下とも一七八五頁」

片桐 一男 著

『平成蘭学事始 江戸・長崎の日蘭交流史話』

鎖国の間も日本はオランダを長崎に限って入港させ、一般と隔離した出島の蘭館を唯一の拠所として交流がおこなわれてきた。

片桐一男氏は対外交渉史における通詞の存在に注目し、当時専門書でなかったこの職業団を研究して『阿蘭陀通詞の研究』（吉川弘文館）を世に出した。内外の資料から実証的に解明把握し鎖国下の日本に海外情報と世界知識を取り入れた通詞たちの業績を示した。

本書は著者が青山学院大学定年を前に、二十八年にわたる研究を通してその間に発表した新聞や雑誌記事などをまとめたものである。第一章では阿蘭陀通詞という役人の足跡を追う、江戸文化を守り育てる上に貢献した業績を具体的に紹介している。

第二章は日蘭交流の舞台となった出島を蛮館の囃入りで説明し、江戸町の通詞会所と通詞部屋の位置を示す。

第三章では来日したケンペル(KAEMPFER)、ツェンペリ(THUNBERG)、シーボルト(SEIBOLD)が、出島で独自の調査を実行した状況を追っている。この三人の旺盛な知

識欲、意欲的な活動、また彼らと交った日本人の姿を、深い理解力で活写し、ノートを破りつつたメモの走り書き一つも見逃すことなく紹介して感動を伝える。

五章六章以下八章までアヘン戦争を伝えた情報や砂糖・カステラ・オランダ料理、蘭学者の生き方と影響など史料に則しながら、こと細かに描いて飽きさせない。

著者は『杉田玄白』（吉川弘文館）や『蘭学、その江戸と北陸』（思文閣出版）『阿蘭陀通詞今村源右衛門英生』（丸善）『蘭学事始とその時代』（日本放送出版協会）『開かれた鎖国—長崎出島の人物・情報』（講談社）『阿蘭陀宿海老屋の研究』（思文閣出版）など多くの研究書でオランダとの交流を書き続け、また早くに（昭和四十七年）鎖国時代『対外応接関係史料』（近藤出版社）を校訂して、長崎入津の唐和蘭陀船に関する史料を詳細に紹介し、応接関係職や帳簿書類名また外国船名・人名などを教えてくれた。

本書はそうした長年の道すじで論文に書かなかったエピソードを日蘭交流の副産物とし提供したものだといえよう。時には社会の裏側に批判の目を向けたり、暗夜に手探りで外国語を学んで鎖国下の日本に唯一ヨーロッパの実情を伝えた通詞たちの苦勞を知らせようと願った著者の人情がにじみ出ている。話術の巧みな著者は、一般の人々にもわかりやすく、また研究者への史料紹介として鎖国時代の興味ある史話を時には対話形式で或いは独自の形で披露してみせる。珍らしい絵図や写真を惜しみなく用いて、この時代やオランダに関心の

なかった人でも恐らく引き入れられていくだろうと思える内容の濃い本である。

(望月 洋子)

〔株式会社智書房、文京区白山二一五—二、電話〇三一五六八九—六七一三、A五判、三三八頁、一八九〇円〕

川村 純一 著

『千葉県伝染病史』

著者は一九九九年に『病いの克服 日本痘瘡史』（思文閣出版）——これについては学会誌四六巻一号に、蔵方宏昌会員によって新刊紹介欄にとりあげられている——を上梓して、わが国における痘瘡の歴史を俯瞰することに成功した。それから五年後の今年、千葉県という一地方に限られてはいるが、そこで流行したいくつかの伝染病をとりあげて、克明に事実をおって完成したのが本書である。

著者は一九二六年生まれの眼科医である。早くから医史学に関心をいだいて、本会会員として地道な活躍をつづけている篤学の士であり、房総石造文化財研究会に所属して地域の歴史にも造詣が深い。そのような背景にささえられながら三〇数年にわたる「郷土医学史」、とくに「治療信仰」の研究で、一九九五年に日本医師会最高有功賞受賞の榮譽に輝いている。

本書は「序章」からはじまり、五部に分かれている。I部の「伝染病の流行」は痘瘡、コレラ、ペスト、発疹チフスの流行史である。確実にたどれる文献にもとづく歴史なので、これらの諸病はすべて明治以降の時期にかぎっているのは、事実を追い求めようとする著者の意欲の表れであろう。

II部の「種痘の普及」は、これらの伝染病の中で予防しうる唯一の疾病である痘瘡の予防、すなわち種痘の歴史である。江戸時代の県域各藩——佐倉藩、佐貫藩、勝山藩、柴山藩の四藩——における種痘の実施状況にふれたあと、明治以降の接種状況にふれている。接種料金についても言及して、とかく忘れがちな予防接種の経済面におよんでいるのは、正しい見方であるといえよう。現在では各地方自治体とも予防接種料金は無料であることがおおいが、そのころの物価にくらべてけつして安価ではない接種料金は、接種を希望する民衆にとつては相当な負担であったと想像される。これが障碍となつて種痘の普及をはばんでいたとする著者の論証は、おおいにうなづけるところである。

これにつづいて「種痘事故」にふれている。一九七〇年のいわゆる種痘禍を経験したわたくしにとつては見逃せない言及であり、とくに昭和九年（一九三四）の種痘禍をとりあげているのは注目に値するが、資料の不足によって十分な解明にいたらなかったのはいささか残念といわざるをえない。むしろこのような論考は一地方の出来事としてとりあげるよりも、全国規模において論議すべき問題点であろうとおもう。